

テキストを使って指導する方法

幼児のための「漢字の絵本」を、幼稚園のテキストとして作りました。テキストなしに、今まで述べてきたようなことを、うまくやっていただければ、それですばらしい成果が得られるはずですが、テキストを使用すれば、上手下手なしにある程度の成果が得られますので、編集したものです。

幼文社発行のものは、十冊一組になっています。一年間で使っても、二年間で使ってもその園のご都合です。その使用法(指導法)について、少しく述べることにします。

テキストの表紙、裏表紙の裏側に、指導の原理、原則、注意事項が書いてあります。これらの各項については、お読みになってよく理解したつもりでも、時々(というよりも、本書を手にするたびに)繰り返して読み、誤ることのないようにしてください。私も、幼児の指導に当たっては、常に読んで自粛自戒しています。私のように、二十年近く実行し、自分で考え出したものでも、時々読まないとな手の抜けることがあるものです。

これは指導がむずかしいということではありません。教育というものは、

“丹精”ということが大切だと思うからです。丹精が必ず結果に現われるからです。

野菜一つ作るのでも、雑草の一本を抜き、小石の一つを除けば、それだけ“でき”が違ってくるではありませんか。そういう意味で、私は、自分の書いたものを、心して読むのです。

〔漢字の絵本による指導例〕

P1に、女の子が口もとを指さしている絵があって、ページの上隅に「口」という字があります。

「この絵は何の絵ですか。」と質問し、子供たちのいろいろな答えを聞いて、

「そう、女の子の絵ですね。何かしていますね。何をしているのでしょうか。」

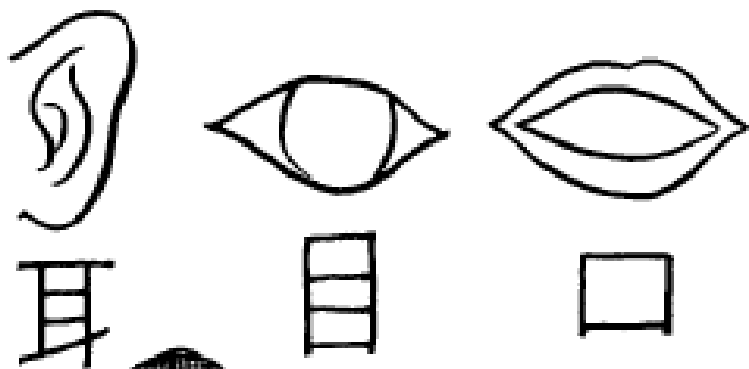
「そう、指でお口をさしていますね。お口が大きく開いていますよ。何かお話をしているようですね。何て言ってるんでしょうね。だれか言える人？」

「先生はね、“これはクチです”と言っている所だと思いますよ。」上隅の口という字をさし示して)

ここに、大きく口を開いたような形の字がありますね。これはクチという字です。(黒板に、ゆっくりと「口」を書き)クチ。いいですね。クチ。では、皆で一緒にこの字を読んでみましょう。はい、クチ。もう一度はい、クチ。皆さん、とてもよく読めました。」

P2

「一番上のここに、口の絵がありますね、その下にあるこれは、昔のクチという字です。ちょっと絵のようですね。でも、これは昔の字なんです。



象形文字は簡単に覚えられる

その下にあるのは、今のクチという字ですね。これは、前に習いましたね。今の字は、まっ直な線で書きますから、四角い形になっていますよ。」

「これは、何の絵ですか。そう、メですね。目の絵です。その下にあるのは、昔のメという字です。桃太郎さんの習った字ですよ。

その下にあるのが、今のメという字です。今の字は、四角い形ですね。桃太郎さんは、こっち(上)の字は読めますが、こっち(下)の字は読めませんよ。桃太郎さんが出て来て、この字読めないって言ったら、皆さん、教えてあげましょうね。」

「これは、何の絵ですか。耳ですね。耳の絵です。その下は何ですか。(答えがなかったら、口、目の例から、それが“昔の字”であることを類推させます。)そう、昔の耳という字です。よくわかりましたね。えらいねえ。では、その下は何でしょう。はい、そうです。今の耳という字です。よくわかりましたね。」

「では、先生が黒板に字を書きますから、皆さん、元気に読んで下さい。(「口」「目」「耳」をゆっくりと書く。)」これを繰り返して読む。

毎日、本を出して読ませることが大切です。一日、一ページから二ページ。一冊を一か月で終えるか、二か月で終えるか、それに従って適当に割り当ててください。

一回の指導は、五分から十分くらい。気分転換のつもりで、何かの学習に飽きを感じ出した時に、この本を取り出して、前に学習した漢字のおさらいなどをしますと、元気をふき返します。

心理学者の実験報告によりますと、学習した事柄を忘れるのは、学習後一時間以内が最も多いそうです。一時間以後は忘れる割合がだんだんと少なくなっていくのです。

だから、学習した漢字を、四、五十分たってから、つまり、間に何か別の学習、または休み時間をおいて、おさらいをするのが、漢字学習の上では最も有効な方法です。

一般に、“記憶”の原理は“関心”と“反復”だと言われていますが、一般的な復習の時期は、

一時間以内

まる一日後

一週間後

一か月後

というように、記憶期間がだんだん長くなるのに応じて、間があいてもよいようになります。しかし、いくら反復しても悪いことはありません。むしろ、反復することにより、必ずそれだけ記憶は強固になるのですから、できたら、どの学習の時でも常に初めからおさらいすることに努めたいものです。

〔漢字の絵本(二)〕

文字は、漢字から学ばせることが“絶対に”必要です。理由はあとで述べます。ともかく、実体に即して漢字が存在することを幼児に理解させ、幼児たちが、“文字とは、内容(実体)のあるものを表わす符号”であることを、理屈でなく、体で理解させるように努めます。

これがわからないうちに、かなを教えますと、「木しゃ(汽車)が木(来)た」という書き方をするようになります。今の小学校では、この誤りを犯す子供が多く、先生はそれを直すのに手を焼いていますが、漢字を先に理解させる石井方式で学習した子供は、絶対にそういう誤りをしません。

かなは、本末、音声だけを表わす字ですから、内容をもたない“テニヲハ”や“用語の活用語尾”など、漢字の補助として用いるのに適した文

字です。

「漢字の絵本(二)」は、そういう考え方に基づいて“かな”を提出しています。かなを覚えることは、漢字に比べてむずかしいですが、漢字の補助として、漢字といっしょに覚えますと、案外早く覚えられるようです。

P1

「花子」「顔」「口」「目」「耳」「一」「二」等の漢字の復習、確かめをします。これらは、これまでにそれぞれ“漢字カード”に作られて、子供たち



の目に触れられるようにしてあるのがよろしい。

「口は一つ、目は二つ、耳も二つ。」これは先生が読んでみせ、子供たちにはそれを模倣させます。従って、かなを一字ずつ教える必要はありません。

まして、「は」は「ハ」と読む文字だ、などと教えることは無用です。子供たちは、知っている漢字を頼りにして、全体を先生のまねをして読んでいる間に、自然と、「は」は「ワ」、「つ」は「ツ」、「も」は「モ」と発音する字だなと推定し、覚えます。

「は」と「も」の使い方について、いろいろ別の例を多く引いて理解させます。

P2～3

「笑っている顔は、良いお顔、泣いている顔は、悪い顔。」を、続けて調子よく読んでみせ、それを子供に模倣させます。

一字一字は読めませんから、全体を暗誦させるようなつもりで、調子よく読ませることです。

この文の中には、すでに知っている読めるのは「顔」だけです。従って、実際、丸暗記して読むのに近いのです。こうして、一字一字をわか

らずに読んでいるうちに、「笑」「良」「泣」「悪」という漢字が印象に残るようになります。

そこで、これらを漢字カードに作り、「笑う 泣く」「良い 悪い」というように、対比させて掲示し、対で理解させるようにします。

P 4 ~ 5

「赤い目」「青い目」になるように、にそれぞれの色を塗らせましょう。

「赤い」「目」「の」「兎さん」をそれぞれカードにし、ばらばらに掲示しておいて、これを正しい順序に並べさせる仕事を課してみましよう。

P 6 ~ 7

「が」が、昔は「」で、手の形を表わしていて、「手」のしるしであることを教えます。

「右」という字が、「手」と「口」とでできていることを理解させます。次に「右」は、“口と仲良しの手”であることを理解させます。

「左」の「工」を茶碗に見立てます「左」という字が、“茶碗を持つ手”であることを理解させます。

この時、茶碗を持って、御飯を食べるまねをさせます。そして「はい、

茶碗を持つ手を上げて。」「はい、それがこれ(左)ですね」「では、お口に行く手、お口と仲良しの手を上げて。」「はい、それがこれ(右)です。」

P 10 ~ 11

「小犬」の「小」と「子猫」の「子」と、発音は同じく「こ」だが、意味が違うこと、また、どのように違うかを理解させます。

たとえば「大きい子犬」という表現を使って理解させます。「子」は「親子」の「子」で、“子供”の意味。だから、「大きい子犬」だってあることを理解させます。

「馬」「牛」「羊」「が(二枚)」「も」「いるよ(三枚)」の九枚のカードを作り、これを順序よく、

「馬」「が」「いるよ」

「牛」「が」「いるよ」

「羊」「も」「いるよ」

と並べさせる仕事をやらせます。

また、馬と牛と羊の順序を入れ換えて、これを読ませます。